
キングダム

pickme

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キングダム

【Nコード】

N6138K

【作者名】

pickme

【あらすじ】

ちよつとだけ未来の話。

セリカは若干17歳。月の研究所で地球の汚染を研究する天才研究者。

汚染がひどくて人が減少していつている地球。裏腹に月やコロニーと呼ばれる衛星へは多くの人々が移住し、繁栄していた。

そんな時、見捨てられたに等しい地球の研究所、通称“キングダム”からセリカは招待を受ける。

様々な思惑が絡み合う中で、セリカは地球に向かう。

そこは敵地。

一瞬も気を抜けない場所だったはずなのに？

博物館並みの最先端。オンボロ機械にヘンテコな“キングダム”の
住人たち。

彼らに振り回されながら、セリカは真実を見つけていく。

本当の居場所はどこにあるのか。

時にシリアスに多少・・・コミカルに行きたいな～と思います。
ちよつと違うけど・・・学園ドラマ調！

その1 始まりの雨と密談

その1 始まりの雨と密談

「ほう、そっちは雨、ですか？」

薄闇の向こうではの暗い灯りに水滴がはじける。

一面ガラス張りになっている部屋の向こう側は、どんよりと闇色の雲が空を覆っている。ドームの内側とはいえ、雨の色もくすんだグレイの色。

その光景を振り返りもせず、ああ、と彼は頷いた。

「ええ、まあ。1週間に一度、夜に雨を降らすのですよ。空気浄化の目的も含めて」

「なるほど」

画面の向こうの人影は納得したように頷いた。

もともと、そんなことには何の関心も払っていないのだろうが。男はさらに画面の向こうから声をかけた。

「ところで、例の件は？」

まだ若い、張りのある声。

多分、自分よりもずっと若いのかもしれない、青年。
気楽な空気も手伝ってか、軽く肩をすくめる。

「了解しましたよ」

気が抜けたように笑った。全ての電気は落ちており、今目の前に見えるのは画面の中の男の姿のみが浮かび上がっている。男の、シルエットのみが。この男の顔を、一度も見たことがなかった。顔を明らかにしない男。

しかし、不審を抱き探るには危険過ぎる男だ。
おどけて手を広げて見せる。

「実に信じられないことに、頷きましたよ。彼は。どんな交換条件を提示したんです？今まで我々があらゆる手を使っても頷かなかった彼が。・・・いや、詮索するつもりは無いのですがね。あなた方の協力者として、我々も彼に対しては手を焼かされておりますから」

「ツヴァイク・ライドーン殿。もちろん、あなたの政治的手腕を疑ったことなどありませんよ。我々としても、これほど安易に事が運ぶとはいささか意外だったことは確かですからね。ですが、残念ながらこれは二度と使える手ではありません。だからこそ、効果が出たのかもしれませんが」

「なるほど」

皮肉げに彼は唇を引き上げる。

「では、それから先の交渉はこれまで通り困難なことには変わら

ないと」

「だからこそ、あなたの方が必要になるのでしょうか。．．．これまでと同じく」

多少浮かれていた気持ちに冷水がさされた。冷やりとした気持ちで、画面を見る。

だからこそ、用無しと片付けられることなくまだ手を組む局面にある、とそうこの男は思っているわけだ。

油断をしていると、足元をさらわれる。

だが、ここでこいつらに恩を売ることができれば、コロニーだろうが月だろうが、思いのままの暮らしができるというわけだ。

踏み込み過ぎは禁物。

彼は感情を押し隠し、鷹揚に頷いた。

「次の会議で決定となるでしょう。必ず」

影の男は、光の中で頷いたようだった。

「人類は我々の手で、救われなければなりません」

画面の向こう。影は空々しく呟いた。

「ふうん・・・来たんだ」

小さな呟きに、相手は顔を上げた。

身長はわずかに目線が下。ひよろひよろした体つきの癖に、背ばかり伸びてきた。もうすぐ追い越されるだろう。何しろ相手は成長期。

「出迎え、俺に頼んだんじゃなかった？」

濃いサングラスの下で、目が真っ直ぐにこちらを射抜く。

「その格好・・・抜け出てきたんじゃないだろうな」

一般人とは言いがたい雰囲気をかもし出しているのは、ひとえにヤツの服装が悪い。着替える暇もなかったらしい。否、珍しく失念していたのか。

そんなことすらも。

「いや・・・」

案の定、改めて気がついたようにヤツは自分の格好を見下ろす。

失敗した、とばかり吐息をついて、鬱陶しそうにサングラスを外した。現れた鮮やかな目が、鋭く射抜いてくる。

「彼女は？」

「まだ・・・シップは着いているよ。しばらくすればゲートから出てくる」

わずかに頷いて、ヤツは歩を進める。

「あのさ、会うわけ？」

その格好で？

言外に込められた意味を正確に読み取って・・・それ以外もろもろも。

「問題でも？」

「大有りだね。最初っから話し合っただろうが」

斬り付けるように鋭い視線。俺に睨まれてもなあ、と嘆息したくなる。このまま会って・・・それはそれで面白いかもしれないけど。

「まだ早い」

すっつとやつの目が俯いた。

「・・・分かっている・・・会わない。ただ、一目だけ」

「ここまできて何を弱気な。俺が連れて行くって言うているでしよ？」

「分かっている」

再び歩き出したヤツの背中を追いながら、結局分かってないよな
あと彼は苦笑した。

その2 S E R I K A

その2 S E R I K A

鉛色・・・

薄汚れたガラス窓の向こう。立ち込める雲の色は、どんよりと鈍かった。そこから僅かに覗く空さえも、同じような色合いだ。

そつと外をさえぎる薄汚れたガラスに白い手を翳す。

分かっていたことだけれど。

僅かに開いた唇から、ため息が漏れる。

黙々と歩く護衛官達の黒い服。

すれ違う人達の顔も、どこか疲れているように見える。

これが地球・・・

人類発祥の地。

でももう、この星は、何を生み出す力も無く、ただ暗然として廃墟のように放置されているように見える。墓場みたいに。

キュルル

そのため息を聞き取ったかのように、肩に乗っているモノが鳴いた。

「ラウ・・大丈夫。大したことじゃないの」

そつと手を伸ばして、それを撫でる。手のひらに乗るほどの、真っ白な長い毛に覆われた動物。ふさふさの尻尾が、自身の身長より長く揺れている。

そうやって、言い聞かせているのは自分自身に。

分かっていたことなのに。

初めて見た地球は・・・星の生命が感じられない。

唇をかんで、眼を上げる。周りを取り囲んでいるのは黒服の集団。無表情な人々の波にあつても一際目立つ。不穏な空気を感じるためか、人々の波はここを綺麗に避けていた。それもそうだろう。彼らはプロの集団なのだから。“護衛”という名の。

檻みたい。

黒い檻。

そう考えて、自嘲がもれる。

変わらない。結局私は、どこにいても。

“護衛官”の一人が、ふと真つ黒なグラス越しにラウを一瞥する。

その視線からかばうように体の角度をずらし、睨みつける。コロニーからの護衛には、未だに慣れることが出来ない。どこに居ても同じ。結局は檻の中。

“ 先日地球連邦政府会議により、地球の第一、二、四、六地域は、第三次汚染地区の指定を受けました。それと同時に、コロニーへの移住を推奨する連邦政府が、宇宙軍旗艦アルスコピオを筆頭に3隻の大型軍船を地球の第三スペースポートに向けて発進するとの意向を明らかにし、当面の生活物資と輸送手段を提供する方針です”

黒ずくめの護衛官の頭越しに、薄汚れた旧式のスクリーンがある。ニュースキヤスターの事務的な表情が映し出されている。声もまた機械的だった。

画面が切り替わり、軍艦が映る。

星くずの宙を巨大な黒い影が移動している。

“ また、これと同時に地球連邦政府は本格的に本拠地をコロニーに移すことを検討し、本年度中に建設計画が本格化する予定です”

その先を聞きたくなくて、セリ力は先を進みだす。

地球は、もうこれで終わるのか。

微妙に保たれていたコロニーと地球の関係が、これで崩れた。コロニーが、いよいよ地球に支配にまた一步踏み込んできたことになる。とつくの昔に、資金でも勢力でもどちらが優勢かなんて分かりすぎていた勝負だけだ。

コロニーは、元々金持ちが作り出した支配圏だ。年々コロニーに移動する人々は増え、発言権は高まっている。

けれど、ついに・・・

じわり、と広がった苦い思いに、セリ力は何とかため息を押し殺した。

第三次汚染地区に指定された所は、ゆつくりと人の住めない所になるだろう。無人の機械だけが動いている、巨大な工場が出来ていくさまが思い浮かぶ。汚染地区に指定されれば、環境のためにされていた規制がなくなる。今までも散々汚染してきた地球の現状を、更に加速させることになる。それが進んで、もしも第一次汚染地区が指定されれば、生物の死滅を意味する地域になる。

その昔、地球の汚染はそのまま人類の滅亡と直結していった為に、世界的な流れが地球環境を悪化させないように法を整えていった。高い税率や法的な規制でだ。

ところが、宇宙に浮かぶ都市、コロニーが出来て流れが変わる。

人々は廃れて力を失った地球を捨て、財力のあるものからコロニーへ、月へと移住をしていった。そして、捨てられていった地球は、温暖化のために海水が上昇し、埋め立ての人工島が相次いで建設され、鉛に覆われた機械だらけのフルマシン・タウンと生物の育たな

い砂漠と僅かな土地だけが残った。

今や地球ではその僅かな土地にコロナーを作った技術を持ち出してドームを作り、辛うじて地を這うように生活している。地球で工場を持つ大富豪は、大抵コロナーや月に移住をしているから、もはや地球がどうなるかと知ったことではない。

コロナー政府は、それまでの法を根幹から覆す汚染地区という法を作りだし、地球連邦政府にこれを認めるよう要請していた。それに対して地球の政府側が条件を一部認めたことになる。

1度認めれば、後はなし崩しになることくらい目に見えている。

もうこの流れに逆らうことなんて出来ないだろう。

・・・もっとも、私には関係無いけれど。

「トエラ博士？」

護衛官と同じ黒いスーツ、サングラスの男がそう促した。

ちらりと目を上げて、口元を引き締める。

相手の薄い唇が、僅かに笑んでいる気がする。薄く、冷たく。

「ええ」

分かっているわ。

今更怖気づいてなんていない。

息を吸って、再び歩き出そうとした。

キュウ

ラウが急に弾むようにするりと手から抜ける。

「ラウっ？」

白い、毛玉のように丸いモノは、護衛官達の足元を潜り抜け、飛び跳ねながら人ごみの中を走る。

「ラウ・・・待ってっ」

右へ左へ人波を縫って、ラウは走る。

「きやあっ」

「うわっ」

人ごみを逆走する形になって、駆け抜けた左右前後から大小の悲鳴や声が上がっている。でも、こんな所で逸れたら。見つけられないかもしれない。

「ラウっ どこに行くの？ラウっ」

手を伸ばしても、後少しのところで逃げられる。延々に続いた追いかけてここに、息が切れてきたとき、ようやく前に行く白い毬は動きを止めた。

キュウ

きよろきよると周りを見て、困ったように、こちらを振り返る。
何かを探していたのに、分からなくなったといった様子だ。

弾んだ息をなだめて、手を伸ばしようとしたとき、別の手が伸びて
ラウをひょいっと掬い上げた。

「あ・・・」

「君のククツト？」

頭1つ以上高いところから、首を傾げるように青年が立って、ラ
ウを差し出していた。ばたばたとラウが短い手足を動かして、もが
いている。

両手でそつと受け取ると、ラウは嬉々として肩や頭を走り回り、
最終的に元いた肩に留まって、軽く喉を鳴らした。ほっと息を漏ら
して、撫でると、キュウと小さく鳴いた。謝るように。

「よく慣れているようだね」

「ありがとうございます」

慌てて頭を下げる。

いや、大したことしていないから。

そう言う青年の声を、頭の上で聞く。

「時に、君、セリカさんじゃないかな？セリカ・トエラさん」

視界の端に移った相手の黒い靴が、うつすらと埃を被っていることに気をとられていたセリカは、え？と顔を上げる。スタンドカラーの黒いスーツジャケットに身を包んだ青年は、にこやかに笑う。

「セリカ・トエラさんでしょ。いやあ映像で見るより可愛いねえ。どうもよろしく。僕、＜キングダム＞から迎えに来た者です」

こちらが頷く間もない。青年は笑顔のまま手をとった。

見上げた青年は、肩を越すくらいの長髪を後ろで一まとめにし、通った鼻筋にシャープな顎を持っていた。目は、淡い空色に、丸メガネ。

彼は、トリヨ・スフェルツと名乗った。

その3 Welcome!

その3 Welcome!

灰色・・・

道も建物も乗り物も。そして空も。多分空気も。

コロニーのほうが、まだ綺麗だった。

かつての地球をそのまま写し取ったといわれているコロニー。植物も土も、微生物も、動植物も全て地球から持ちこみ、今ではコロニー内部で小さな生態系を確保するまでになっている。ひしめくビル群の代わりに総合居住区と名づけられた中央の巨大な建物。その周りにある緑地と公園。古い町並みをそのまま再現したコロニーアルファ政府の建物や工場。そして、学院……。投射された青空で包み込まれた、完璧な、美しい箱庭。エアーコントロールは完璧で、いつでも常春にしておくことができる。

それなのに、本物の方が、死んだ色をしている。

こうやってこの星を殺したのは、一体誰？

「ああ、雨が降り出したね。今日は、そんな予定だったかな」

予定って・・・じゃあ、違う場合があるの？

長閑なトリヨの言葉に、セリカはまじまじと相手を見返す。

「うーん。最近、老朽化しているからなあ。シティーの天候制御装置。ああ、そんな顔しなくても大丈夫。メインのエアークントロールシステムが異常をきたさない限り、死にはしないよ。問題はやっぱり、汚染物質だし」

実験を繰り返した核爆弾の名残と、放射能汚染物質、工場から吹き上げる煙に含まれる様々な汚染物質、排気ガス。それらは核戦争をささやかれていた日々に着々と大気に蓄積されて世界中に蔓延した。

やがて人々は気づくことになる。核戦争をしなくても、このままでは滅びの道を辿ると。疲弊していくばかりの土地、人々は外の空気を満足に吸うことも出来なくなり、病が蔓延した。人は、毒素を含む空気を締め出す半球をかぶせた形のドームを作り、そこでようやく生活を営んでいる。ドームの外の世界は死の世界だ。巻き起こる砂。容赦のない紫外線。毒素を含んだ空気は、乾いた風に巻き上げられ、全てを汚染していつている。植物はもちろん、生物のいない世界へとなっているのだ。

人々はその限られた狭い土地の中で、身を寄せ合うように暮らしていかなければならなかった。

「あの・・・」

ウィーン・・・小さな電子音がして、窓の外に、もう一枚の黒いガラスがせりあがってきた。みるみるうちに、視界が閉ざされる。

「大丈夫。今から地下入るから。それだけだよ」

にこやかにトリヨは説明する。

「地下に入って、上がったところが到着。ああ何？もうちょっと、シティーのほう、見たかった？でもあそこら辺、スラム状態になっていて、結構危ないからね。セリ力ちゃんなら、護衛連れて行かないか。もっとも、あの黒服のお兄さん達は凄かったけどね」

ちらつとセリ力はどこか呑気に言つトリヨを見る。

融通の効かない護衛達を、どう言いくるめたのか。その中の一人は、アブルの諜報員だと言うのに。

セリ力を案内するのは、この学院からの迎えと称する青年だけだった。護衛は空港で戻っていった。読めない人物。

のんきそうな顔をしているが。

荒廃している都市など見たいとも思わない。

すぐに視線を逸らして前を向く。オートメーション操作の車には、二人のほかには人影はない。前が次第に明るくなってきた。

スモークガラスが下り、光が差しこんでくる。

え？

曇っているけど・・・明るい。

先ほどまでの暗澹たる空とは、どこか違っている。一つ膜を取り

払ったようだ。

かちゃり。

不意に開けられたドア。いつの間にか、車は止まっていたのだ。そこから手を差し出して、ふっと彼はメガネ越しに水色の目を細めた。

「ようこそ、キングダムへ」

「皆ーっ 連れてきたよー」

ばぁんっ

派手に扉を手で開き、トリヨは堂々中に入る。

あっけに取られて、セリカはその場に突っ立っていた。

真っ白の光が、部屋中に満ちていて、眩しい。目を細めた。

初対面となるであろう学長に、緊張する目を向けた……のだが。

「おっそーいっ」

ものすごい勢いで、言葉が返ってきた。

だんつと足を踏み鳴らす、ほっそりとした人影。頭が大きい？否、髪？

「トリヨ、何していたの？まさか、余計なことしようとしたんじゃないでしょうね。セリカは疲れているんだし、初日から早々に何かぶちかましたり、してない？！」

光を背に、逆光の中を二王立ちしているのは、どう見ても女の子。随分と若い。同い年くらいではないだろうか。褐色の肌の美少女は、腰までのふわふわの波打つ髪を後ろに払って喚く。

「パル・・・そりゃあんまり」

件の青年が、がつくりと肩を落とす前で、だんだんと少女は足を踏み鳴らした。

「あんたには前科があるんですからね！訴えられないうちにとつと吐くっ」

びしつと指を突きつける。

「パルー。大体、まだ予定時間からそう遅れてないでしょ」

「気にしない気にしない、これはれっきとした八つ当たりだからさ。せつかくの日に、セネとセインが見つからないから」

ひょいっと第3者が口を挟む。今度は、栗色の綺麗な髪、美少女と間違えそうな美少年。声を聞かなければ、十分間違えること請負の大きな深いブラウンの目が、小作りの顔にこれ以上はないほどのバランスで収まっている。こちらも随分と若い。その印象的な目

で、セリカを見てにつこりと笑う。

「パル、彼女、びっくりしているよ？」

「ティファ。前から思っていたんだけど、唐突に人の話に絡むの、止めなさいよね」

さすがにまずいと思ったのか、ややトーンを下げてパルはティファをこづく。

「セネのことになると、見境ないから」

ティファは肩をすくめた。

「そうよパル。落ち着いて」

奥からもう一人が、宥めるように少女の方に手を置く。さらりと頭を傾けて髪を流す。こちらは対照的に抜けるような白い肌と真っ直ぐの金茶の髪をした少女は、人形のような綺麗な顔に、笑顔を浮かべた。

「まずは、自己紹介をしましょう。私は、アルシナ・ファターダ。アーナと呼んでね」

それが一番建設的だと気づき、パルは頷いた。そうそう、としたり顔で頷いているティファの肩を小突くのを忘れない。

「私はパル。パフィーラ・メデオ、よ。ごめんなさい、びっくりさせてしまったわね。一応、副会長をしているの」

やや頬を赤らめながら、勝気な少女は名乗った。

副会長？

「僕はテッド。テオルファ・ハイナーガード。よろしく」

笑みを含んだ茶色の目で、小首を傾げるように挨拶する。潤んだように揺らめいている目が、不思議な空気をもし出している。

「テッドなんてよく言うわ。気にしないでね。ティファって呼んでやって」

いたずらっぽく笑って、パルはティファの額をつんとつつく。

「パルー君ねえっ こっちこそ前前から言おうと思っていたんだけど、いい加減その呼び名、止めるよなーっ」

実に嫌そうな顔で、美少年は少女に文句をぶつける。が、パルは澄ましたものだ。

「いいじゃないの。もう皆使っているんだし」

「よくなーい！それ、女の子の呼び名って、まさか分かっていないはずないよな」

「いいじゃない。ぴったりなんだから」

益々ティファは白い顔を赤らめる。その様は、確かに麗しい美少女そのものだ。彼が口を開きかけて、

「煩いっ あーもう、ろくに眠れやしねー」

奥のソファーから、さらに一人、伸びをして立ちあがった。

がしがしと短い金髪の頭を掻きながらあくびを漏らしている。

「あー。アーウィン、ちょうど良かった。彼女、着いているわよ？」

パルが手招く。

「え？ああ、そっか」

すらっとした影が立ちあがった。年はさほど変わりなさそうだが、群を抜く長身だ。トリヨと変わらない。

「よろしく、アーウィン・シエンジエだ」

どこか寝ぼけ眼で、彼は手を差し出す。晴れ渡ったような青い目が印象的な少年。一番体格が良く、細身とは言えしっかりとした骨格をしている。みんなよりほぼ、頭一つ高い。

「・・・セリカ・トエラです」

差し出された手にようやく我に返って挨拶をする。どうやらこちらの自己紹介は不要らしい。

「あとは、セインとセネ、よね。どこにいるのかしら。あいつら」

「二人とも没頭し出したら耳に入らないからねー」

うーむとトリヨが腕組する。

「コール、鳴らしているんでしょう？」

アーナがパルに確認する。

「ボリウムMAXでね。仕方ないわ。それは後にして」

「そうそう。後にして取りあえず」

『キングダムへようこそ！』

笑顔で、彼らは大合唱、した。

その4 SENE

その4 SENE

つ・・・かれた・・・

へたり込みの心境で、セリカは案内された自分用の研究室に座り込んだ。

何なんだろう、ここ。

ホントに学院？そりゃ、地球の、しかも東アジア地区の一番端の、とんでもない辺鄙なところというのは知っていたけど。ある程度、覚悟してきたけど。

予測にないことばかり起こって、頭はショート気味だった。

たとえば、木の匂いのするデスクも、全体がオートコンディションになっていない学院内部も、機密性が殆どない薄っぺらのドアと、そして、全体が20世紀の資料でしか見たことないような建物という現実。それらにはあきれ返るしかなくて。

“最先端に行く研究施設”の振れこみが“学院”じゃなかったかしら・・・

これじゃ、博物館並みの“先端”だ。

冗談ではなく頭痛がしてくる。そのままデスクに額を押し付ける。

そして、もう一つ。

ここの“生徒会”だ。

理事長、学長共にいつ戻るか不明。代わって学院の運営の全権を任されているという、“生徒会”は、どう見ても十代の“研究候補生”達だった。“研究者”ですらなさそうだ。その彼等が、“学院”を運営？あの面子で？

夢なら覚めて欲しい。それとも、地球はこんな“学院”が当たり前なのかしら。

決して同じ水準なんて・・・コロニーの“学院”は設備も内容もトップクラスの水準を誇るといわれているから・・・期待していなかったけれど、これはあまりに酷いのでは。例えば題目だけにせよ、＜世界精鋭の研究機関＞という触れ込みは生きているはず。

そう思っていたのに。

スペースポートから、じわじわと押し寄せてきた後悔の波。それが本格化してきて、セリカはため息を一つ落とした。

こんな所で、本当に研究が出来るの？そもそも・・・あんな研究が？何かの間違いじゃ・・・

きゆうう

小さな泣き声と共に、カバンの端からラウが抜け出し、たつと机

の上に飛びあがる。

「ラウ」

覗きこむしぐさに、セリカはデスクに頬を付けたまま少し微笑んだ。

手を伸ばすと、すりすりと体をこすり付けてくる。

「母さん・・・」

小さく呟く。

ラウが突然、ぴくっと大きな耳を立てた。

え？

セリカもそれに反応して体を起こす。

カラン・・・

すぐ近くで音がして、セリカはそちらを振りかえった。

人？

方向を見て、眉をひそめる。反対側の端に、もう一つ扉があり、研究室とプレートが掛かっている。

まさか・・・

僅かに息を吞んで、セリカはそこにあった細い木の棒を掴んだ。

息を潜めるようにして、扉まで移動し、伺うようにそつと開ける。
どんなに静かに開けようとしても、ぎしぎしときしむ床まではどう
しようもない。しかし、中にいる何者かは気付かないようで、かち
やかちやと作業を続けている。そつと中に入ろうとして、セリカの
足元を、小さな物が走り抜けた。

「あ・・ラウっ」

とつさに止めようと声をあげる。が、ラウはもちろん止まらずに、
中の人物に駆け寄っていく。それを追って、セリカはとつさに木の
棒を構えた。

きゅわっ

顔面に白い物体が張り付いた。

「うわあっ」

「覚悟っ」

セリカは相手に木の棒を振り下ろした。

「ええっ？」

カッシャーンっ

え・・・

はかない音に、セリカは自分がしでかしたことを知る。

何とかよけた相手の肩先に、木の棒は埋まっっていて、そこには碎けたシリンダーが散乱していた。

「噓っ」

壊した！？

思わず棒を放りだし、シリンダーを手に取りろうとして、手が止まった。もう一人の人物が、手を掴んで止めたのだ。

「待った……ったく、随分な挨拶だな」

ようやく顔に張り付いていた動物を引き剥がし、彼はじろりとセリ力を見上げた。

「手を離さないよっ 泥棒がつべこべ言える立場？あなたのお陰で、大切な機械が駄目になったかもしれないのにつ」

視線にひるんだのは一瞬。次にはぶり返した怒りに、怒鳴る。

「はあ？泥棒って」

訳が分からない、と顔をしかめる少年に、セリ力は腹立ちまぎれに少年自身を指差す。

「おい、待てよ……」

ようやく自分のことを言われていることに気付いたらしく、少年はやや慌てたように周りを見て、最後にセリ力を見返した。

それに、どきつとする。

え、蒼い？

掻き揚げた前髪から黒かと思うくらい深い蒼い目。

それから相手は盛大に笑い出した。

「ちょっと・・・何がおかしいのよっ」

心底おかしそうに笑う少年に、我知らず顔を赤らめる。

「気・・・気に入ってたっ あんた、セリカ・トエラだろ？」

まだ肩を振るわせつつ、少年は笑顔で聞く。途端に人懐っこい表情になるのに驚いて、セリカは頷いた。

「俺は、セルネイ・ヒロノ。好きなように呼んでくれ。皆はセネって呼ぶかな」

何、言っているのかしら。

まだ事情が良く飲みこめないセリカに、彼はにやりと笑う。

「パルから何も聞いていない？俺、この生徒。一応、生徒会長なんだけど」

機械関係なら何でもござれの、生徒会長。はじき出された答えに、セリカは目を見開く。

「
あ
な
た
が
？
！
」

その5 生徒会と研究員

その5 生徒会と研究員

信じられない。信じられない。信じられない！

生徒会！

聞いたことはあるわ。そりゃ、数世紀前には中学高等で当たり前にあつた制度だつて。

でも、“学院”は研究機関。いわゆる学校ではない。“生徒”というよりも、研究候補生と研究員の2タイプしかない。特定の企業や地域、国の利益ではなく、人類公共の利益を追求するため、中央政府が設立した施設だ。義務教育、大学を経て入ることが出来る。全宇宙含めても、30程しかこの機関に入れるのは、文字通り、エリート中のエリート。トップクラスの頭脳を持っている精鋭の人物だけ。

セリカがいたコロニーの学院は、その30の学院の中でも指折りの名門だ。研究員、研究内容、コンディション、食事、スケジュール、全てに渡ってコンピューターでの管理が行き届いている。研究員は、万全のバックアップ態勢の下、好きなだけ自分の研究に打ち込むことが出来る。

それなのに、ここ、k-i-n-gポイントにある学院（通称キングダム）は、管理は全て生徒会が行うとの事。さっき紹介された面子

は、生徒会のメンバーだそうで、どう見てもセリカと年もそう変わらないだろう。そして、ここでは研究候補生や研究生ではなく、生徒というのだ。そして、この設備・・・

セリカは、深い深いため息を付いた。

何度目か知れない、後悔のため息だ。

研究員の質も、設備の質も悪いんじゃない？・・・人も集まるわけじゃないよね。

企業の利益から離れた研究機関とは言え、政府からの助成金だけでは賄いきれない研究費は、やはり企業からの寄付に頼るほかはない。自然研究生は、より有名な学院へ、より企業に有用な研究に傾くことになる。年々この寄付金の偏りは大きくなっており、問題になっているのだと聞いた。地球には、たった10箇所しか“学院”がない。その1箇所がこれでは、ほかの場所も押して知るべし、だ。

「大丈夫、大丈夫。これくらいなら、すぐ直るさ」

重いため息を勘違いして、セネはかちやかちやと機械をいじり始める。ロイヤルブルーの、ぴったりとした作業着は、コロニーの研究着に一見良く似ている。

「そうそう、予備のシリンダー、そっちの棚にあるから、取って手にした道具で、くいつと棚を指す。」

ぐっと思わず拳を握る。そうしなければ、相手のペースにはまり

そうだ。

「私・・は、あなたを認めた訳じゃないわ。ここは私の研究室よ。無断で入り込んで、どいうつもりなの」

きつと睨むと、セネは肩をすくめた。

「確かにここは君の研究室だけど？そこに俺がいて、だから？」

かちやかちかと、相手は手も止めない。

ふざけている。

拳で膝を叩いた。険のある眼差しで睨む。

「私個人が使える研究室を、要求したはずよ」

「そうそう。ここは紛れもなく君の研究室だ」

「私が言っているのは、私だけが出入りする研究室のことよっ」

声を荒げるセリカに、逆に相手は不思議そうな顔をする。

「別に、機械を共有しようとかは、思っていないけど？」

「他人がいたら、邪魔なの」

ここまで言っても分からない？とセリカはきっぱり言い捨てた。

ふむ、と少年は蒼い目を上に巡らせて、考えるそぶりをする。

「じゃ、機械、使わない？」

「何ですって？」

聞きかえしたセリカに、少年は整った笑顔を見せた。

「ここの機械。使わないなら、わざわざ出入りもしない。研究室にも入らない。って出来るけど？」

機械を使わない？

そんなこと・・・

考えるまでも無かった。

「出来るわけないわ」

「じゃ、無理だね」

「なっ」

「ここの機械は全部オリジナルだから、メンテロボットに頼むのは無駄だよ？言っとくけど」

にこやかに彼は念を押す。

「・・・あなたが作ったというの。この機械を」

「そう。全く全部が全部じゃないけどね」

セリ力はゆつくりと嘲笑を浮かべる。

「出来るわけないわ」

目の前にある機械は、どれも古い。それに、大きな物で5つの機械があり、小さな物まで含めば10を越す。それら全部を造るには、それなりの年数が必要だ。目の前の少年はどう見ても14、5歳。よっぽどの英才教育を受けても、果たして出来るだろうか？それとも、異端児といわれるほどの天才なのか。極まれに、そんな人物がいるとは聞いている。けれど、そのような人物は政府に保護されているはず。

ここの設備や生徒を見ても、とても後者であるとは思えない。

コロニーですらそんな人物はいなかったわ。

「単なる研究候補生が、そんなこと」

「“研究候補生”じゃなくて、“生徒”だってば」

訂正して、彼は手元の器具を手の中で放った。まるで“生徒”が“研究候補生”より勝っているかのように。

こんな田舎では、まさか“学徒”の方が、地位が上だとも言えるのかしら？

学徒は義務教育の期間に使われ、高等教育の大学を経て、学院（研究機関）に入り、研究候補生となる。この時誰かの研究生の助手という形で経験を積み、更に論文等が認められて、その後にようや

く研究生となれるのだ。

生徒なんて、まるで義務教育を受けているような意味だね。

呆れて言葉も出ない。

それも無理はないのかもしれない。義務教育は、普通16歳までとなれば、目の前の少年が義務教育中でも、何らおかしくない。

でもそれなら、この子が機械を造れる訳がないわ。

少年は、器具を杖代わりにして、顎を乗せ、セリ力を見上げた。

「何と言われても、それが本当のことだよ」

「出来るはずないわ。大体、あなたまだ義務教育中でしょ。大学も出ていないんじゃないの」

それを言った瞬間、彼は目を見開いた。青いくつきりとした目が、丸く見張られて、手から器具が滑り落ちそうになる。呆気にとられたまま硬直し、彼は果てしなく深いため息をついた。頭を伏せたせいで、艶やかな黒髪がさらさらと滑った。

「俺、これでも18なんだけど？セリ力ちゃん」

ようやくセネは、前髪の隙間から蒼い目を上げる。

「うそ・・・」

思わずこぼれた言葉に、彼はますます脱力して頭を伏せた。

そのことに、セリ力は少なからず慌てた。思わず手を口元にやったが、それで発言が取り消されるわけでもなく。

「東洋人？」

生粋の人種は、今時珍しいと言えるだろう。しかし、異人種間同士の婚姻でも、強い因子が残るのは当然で。彼も完全な東洋人ではない。その証拠に、目鼻立ちもはっきりしているし、手足も長い。ただ、東洋人が抱える悩み。童顔までは、中和できなかったらしい。その一言で、彼は遂に頭を抱えたが、その反面ちらりと視線を流すと、

「人のことばかりは言えないだろう？これ本物の髪？作り物じゃないんだったら、君もかなりの東洋人じゃないか」

漆黒の、真っ直ぐな髪。それを掴んで、彼は目を光らせる。

むっとしてセリ力は相手の手を払いのけた。流れてきた髪を無造作に一つに束ねる。

「もったいない。綺麗な髪なのに」

してやったりと、唇に笑みが宿る。

「人のことは放っておいてっ」

セリ力はきつと睨んだ。しかし、彼はそれを気にした風もない。

「ショウジ・トエラ博士は、東洋人だったらいいし。それも、生粋の。セーラ・トエラ婦人もね。だから、君が殆ど生粋の東洋人って訳だ」

初めて出された父の名前に、セリカはちよつと息を呑んだ。

そりゃ、相手の言っていることが本当だったら、生徒会長で、一応ここの生徒を束ねる立場にいるんだから。

知っていて当然・・・そのくらい。

言い聞かせて、ゆっくりと息を吸い込む。

「だからどうだと言うの？父は確かに生粋の東洋人で、汚染科学専門のフルビオ・トエラ博士に師事して、その時に性をもらったのよ」

セリカの挑戦的な言葉尻に、セルネイは僅かに目を細めた。

「だから、この学院に来たの？」

予想外の質問に、セリカは言葉に詰まった。

k - i n g地区の学院は、その昔、地球上に国家があつたころの日本の国があつた場所だ。今はその面影すらないにしても。

それは・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6138k/>

キングダム

2010年10月9日21時27分発行